

石関黒山墓表訪問記 海保漁村による撰と書

海保漁村がみずから書した字を刻んだ墓があると『上総の人 海保漁村』（瀧口房州著 千葉日報社刊 昭和五十二年）で読み、どうしてもその字を見たくなった。それは二年ほど前に当会の荒川先生の力を借りて澁江抽齋の墓碣銘を読んだからである。あのような現代語でしか書けないような内容を、漢語でも表し得るということが私には驚きだった。それに加えて漁村の写真というものが伝わっていない。漁村自筆の自画像というものは残っていて（浜野知三郎編『海保漁村先生年譜 附論語駁異』昭和十三年刊掲載）、それはそれで興味深いのが、大儒と称された人物が自画像を残した真意が測りかねる。私はその人の学問とともに、その人自身にも大いに興味があるので、漁村の字が残っているなら、ぜひそれを見たいと思ったのである。

漁村が文を撰び字を書いたのは石関黒山（寛政十年生まれ）安政五年二月十二日没、享年五十九歳）という門人の墓表で、それは現在、群馬県前橋市陣馬町の小出神社境内にある。私は令和四年六月にここを訪れた。

その字は、幕府の祐筆であった小島成齋（抽齋墓碣銘を書いた）に比べて、遙かにのびのびとし、生き生きしている。これは私が予想していた通りだった。当時の大儒と称され、「周易漢注攷」「尚書漢注攷」の著者として高名な人であったが、その傍らで考証学者らと親交があり、彼らの著

書に多く序文を書いているのであれば、身を修めて読書に日々を送って
いただけの人とは思えない。

字を子細に見れば、縦に長くのぼす線は多くがゆるやかな弧を描いて
おり、横に長くのぼす線も同様である。「はらい」「はね」は必ず右に大
きく伸び、大きく跳ねている。これだけを多々見せられるのであれば食
傷するが、もともとの字の構えがゆったりとしている。字のところどこ
ろに空気を吸ったような隙があつて(9)行目「場」、(11)行目「相」「謀」、
1,8行目「石」、14行目「安」、4,14行目「以」など、これが字にゆった
りとした感じを与えているのだと分る。それ以上に、扁額の「石」字な
どは遊びを感じさせる。

漁村自筆の稿本は「玉篇真本水部攷証」(関西大学所蔵

<https://www.iif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/books/205454712#?page=1>)や「周易古占法 四卷」^ハ

存 二 卷 ヲ (東 京 大 学 所 蔵

<http://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portall/assets/d51fe64d-96b3-36e8-418d-a20cd6636d75#?pos=1>)

などが伝わっているが、この墓表の字は墓に刻まれることを前提に書か
れたためか、多分に余所行きの風があり、その分だけ美しい。

故人を訪ねようとする時、まず思い浮かぶのは墓に参ることだが、漁
村の墓は大正の大震災で失われたという。嗣子である海保竹逕の墓は府
中市紅葉丘の普賢寺にあるが、漁村その人の墓ではない。石関黒山と同
様に、仕官することなく処士として生涯を終えながらも、大儒として畏

怖された漁村の、少々畏まった姿がこのようなかたちで見られるのであれば、大変に貴重な墓表と言えるのではないだろうか。

最後になりましたが、今回も当会の荒川緑先生に原文の訓読などで、多々ご教示を頂きました。この場を借りてお礼を申し上げます。

◎墓標の写真は、ここからアクセスできます。

http://kien-youchiku.tokyo/00_kokuzan_1000.html

《読み下し文》

石關黒山處士墓表

嗚呼、是れ石關黒山處士の墓なり。處士、農家の子を以てするも、幼より乃ち學を續みて怠らず。長ずるに既およんでは江戸に遊び、業を太田錦城師の門に受け、又た屢いたばしば余に踵いたりて質疑す。蓋し將に進んで古人に己をのれが為の學を求めむとす。居ること數年、河越侯※、其の名を聞くや、辟めして前橋の教授と為す。處士、人に教ふるに孝友惇睦※を以て先と爲す。藩の子弟、久しくして之に化し、駸駸として、嚮學勵行せざるは莫し。侯、之を嘉みして、賜ふに紋服を以てす。人皆な之を榮とするも、處士は性、謙虚なりて託退※す。身、亦た善ばしば病み、教導の缺有るは大いに侯家の學を設けし所以の意に非ざるを懼る。ここ

に於いて一朝、辭去して、頽然と一室に清約して自ら甘んず。而れども子弟の之を嚮慕せる者、猶ほ昨のごとしと云ふ。處士、諱は光芳、字は子蘭、又た勝次郎と曰ひ、石關は其の姓、黒山は其の自ら號する所なり。上毛陣場里※の人なり。父は太郎八と曰ひ、諱は光一、二子有り、長は正曉と曰ひ、次は即ち處士なり。處士、安政戊午二月十二日を以て家に終はり、享年五十九なり。里中、先塋の側らかたはに葬る。配は北爪氏、先づ卒す。子は男一、女二、皆な夭す。葬るの※明くる月、其の門人、相ひ與に謀りて其の碑を營建せむとす。處士、余を信ずること特に篤きを以てや、状を具ぐし来たり、墓上の文を請ふ。余は以て辭す可からず。遂に其の概略を掲げ、以て之に表とす。

安政五季 歲次戊午冬十有一月

江戸 海保元備、撰並びに書す 須藤永裕、鐫ほる

※ 武蔵川越藩五代藩主松平典則 天保七年一月二十三日(1836年3月10日) 明治十六年(1883年)七月二十四日)

※ 「古之學者為己、今之學者為人」(『論語』憲問)

※ 託退 自らの不足を知ってへりくだる 託退於不明、以求賢良、讓之至誠。へ『漢書』晁錯伝)

「夫子踐位則退」(『國語』楚語上) (注)退、謙退也。

※ 陣場里 現在は吉岡町陣馬。

※之 独立した分の主語と述語の間に之を置くことで、「AのBすること」という句になり、文の主語や目的語となる。「狐之有孔明、猶魚之有水也」私に孔明がいることは、魚に水があることと同じことなのだ。(『三国志』諸葛亮伝)

石関黒山処士墓表

嗚呼、これは石関黒山処士の墓である。黒山処士は農家の子であつたが、幼時より学を積んで怠らず、長ずるに及んでは江戸に出て太田錦城師に入門し、また度々私のもとへ至つて疑わしきを質した。恐らくは、孔子の言われた「自己を高め、深めるための学問」を進んで求めたのだらう。江戸で数年学ぶと、その名は川越侯の聞き及ぶところとなり、召されて前橋にある藩校の教授となつた。そこでは、黒山処士は孝友惇睦、すなわち孝行・友愛・誠実・親睦を第一として教授したので、時を経ると学生は感化され、速やかに勉学に勵行せざる学生はいなくなつた。河越侯はこれを嘉みして紋服を下賜されたので、前橋の人々、陣馬の人々は皆なこれを榮譽とした。しかし黒山は性、謙虚であつたので、まだ己に不足ありとして謙へりくだつた。また病気がちでもあつたので、教導に欠のあつた際には川越侯の学校を設けた所以を大きく違えることになるかと懼れたのである。このような次第で、ある日突然に侯のもとを辞去し、その後は故郷でつつましく、心安らかに自らを楽しみ、それを良しとしたのである。しかしながら、子弟の処士を嚮慕することは変りがなかつたといわれる。

処士の生前の名は光芳、通称は子蘭、または勝次郎である。石
関はその姓で、号しては黒山と名乗った。上毛こうずけの国、陣場の里
の人である。父の通称は太郎八、生前の名は光一で、男児二子
を挙げ、長男は正暁、次男がすなわち黒山処士である。黒山は
安政戊午五年二月十二日を以て自宅で終焉を迎え、享年五十九
であった。陣馬の里中の、先祖の墓にやらんで葬られた。妻は
北爪氏で、先に死んだ。子は男児ひとり、女児二人があつたが、
共に幼くして死んだ。黒山を葬った翌月、その門人たちが相い
図って碑を建てることとなつた。黒山処士の、私に対する信が
特に篤かつたからであろうか、門人たちが書状を携え来つて、
墓上の文を請うたのである。私は辞すこと可ならずして、黒山
処士の概略を掲げ、ここに碑文とするのである。

安政五年戊午 冬十一月

江戸 海保元備が撰文し書す 須藤永裕が石に刻んだ

参考図書 『群馬の漢文碑』濱口富士雄（東豊書店 平成十九年）